

多言語使用と感情という視点からみる，ある「誤用」* 定住外国人のエスノグラフィーから

八木 真奈美†

概要

日本語ではいとこを妹と言えば、それは誤用である。しかし本稿の調査協力者であるさくらさんは、自分のいとこを妹と呼ぶ。はたして本当にさくらさんはことばの選択を間違えているのだろうか。本稿は、従来の日本語教育では誤用として訂正されるこの「妹」ということばを「多言語使用と感情」という新しい視点で捉え直し、このことばの背景にある調査協力者さくらさんの意味世界と「妹」ということばの関係を解き明かそうと試みた。

キーワード：多言語使用，感情，誤用，家族，定住外国人

1 はじめに

日本語ではいとこはいとこである。いとこは妹ではない。しかし「中国帰国者」*1三世であるさくらさん（仮名）は、母の妹の娘を「妹」と呼ぶ*2。おそらく多くの日本語教師はこれを誤用として訂正するだろう。しかしさくらさんは本当にことばの選択を間違えているのだろうか。本稿は「妹」ということばの背景にある調査協力者の意味世界を明らかに

し、それを「多言語使用 (multilingualism) と感情 (emotions)」(Pavlenko, 2006, p.xii) という視座で解き明かそうと試みたものである。まず初めに、本調査の分析結果であるストーリーの最初の部分を示す。本稿の調査協力者は2002年4月に来日した「中国帰国者」三世の女性さくらさんである。

「妹です。」

ゆきちゃん（仮名）は、さくらさんのおばさんの娘である。つまり、さくらさんとゆきちゃんは「いとこ」になる。ゆきちゃんのことはさくらさんから聞いていたが、初めてゆきちゃんに会ったのは、私が当時ボランティアとして参加していたある地域の日本語教室だった。さくらさんも来日直後からその日本語教室に通っており、私とさくらさんは毎週1回、その日本語教室でペアを組んで一緒に学習していた。さくらさんの来日から半年ほどたったその日、いつものように学習を終えてお茶の時間になった時、さくらさんが私たちとは別のところに座っていたゆきちゃんを「妹です。」と私に紹介した。私は「あれ、妹いた？」と一瞬思ったが、その時はゆきちゃんの話がそのまま続いたので、確認はしなかつ

* An “error” from the perspective of multilingualism and emotions: Ethnography of a foreign resident

† 大阪大学 (ymanami@pop13.odn.ne.jp)

*1 「中国帰国者」「残留孤児」などの呼称に関しては、たとえば二世、三世についても「帰国」と言えるのか、また「残留」ということばは、日本政府の公式な用語であるが、彼らが主体的に留まったと言うニュアンスがこめられており、責任を逃れるような言い方だという指摘（井出，1991）があるなど、問題点を含んだ用語であるという意味で、ここではすべて括弧付けとする。

*2 人類学では、いとこを兄弟姉妹と同じ呼称で呼ぶ呼び方がハワイをはじめとする太平洋地域で確認されている（Murdock, 1965）。またトンガでは親密さを表すために母の兄弟が「男のお母さん」と呼ばれるという例もある（山下・船曳，1997）。したがって、本論で取り上げているいとこを「妹」と呼ぶなど、日本の呼称体系と異なる例は世界的に見られるものであり、その呼び方自体を特別視するものではない。

た。しかし2005年2月に、日本での生活や日本語学習について聞くためにさくらさんにインタビューを行った時、ゆきちゃんは再びさくらさんの「妹」になった。

筆者 そしたら、あの今家族の中で一番さくらちゃんが日本語がうまいでしょう？

さくら 違う、ゆきちゃん。大学生、私の妹。

筆者 ゆきちゃんもいるね。

(インタビュー中国語 050206)*3

このインタビューでさくらさんは、はっきりと「私の妹」と言っただけでなく、私が質問の時、想定していた「お父さん、お母さん、さくらさん」という「家族」の中にゆきちゃんを加えた。

いとこを中国語の辞書で引けば、表兄弟*4、または表姉妹（母方のいとこ）、堂兄弟、または堂姉妹（父方のいとこ）である。また特定のいとこを呼ぶ時は、年上であれば表兄、表姐（母方）、または堂兄、堂姐（父方）、年下であれば表弟、表妹（母方）、または堂弟、堂妹（父方）と呼ぶと書かれている。これによれば、彼女にとってゆきちゃんは、母方の、自分より年下のいとこであるから、「表妹」と呼ぶことになる。しかし、何人かの中国人の知人に聞いたところ、辞書のようないとこの言い方はあるが、普段は年下の女性であれば妹妹（妹）と呼ぶそうだ。知人の話から考えると、さくらさんは中国でいとこを妹妹と呼んでいたように、日本でそれをそのまま日本語に訳し、いとこであるゆきちゃんを私の「妹」と言ったのだろう。そうであれば、この誤用は行動主義という母語の干渉、すなわち中国語の負の転移ということになり、訂正の対象となる。しかし、私は「妹」のことをほこらしげに話すさくらさんに「日本語では、ゆきちゃんは妹じゃなくて、いとこだよ。」と言えなかった。さくらさんの使った「妹」ということばを、誤用として訂正してしまうことは、私が知っている「さくらさん」という一人の歴史や社会性を持った人間を無視してしまうよ

うで、ためらわれたのだ。

だが、結局私はこのことをさくらさんに尋ねた。論文に家族について書いていると説明した後、「ゆきちゃんのお母さんとさくらちゃんのお母さんは、姉妹だよ。だから、ゆきちゃんとさくらちゃんは、」（研究日誌 061121）とまで言うと、さくらさんがそこで「いとこ」（研究日誌 061121）と言った。さくらさんは、二人の関係を日本語ではいとこ呼ぶことを知っていた。そこで私は知人から聞いた話をして「日本語ではいとこだけど、中国では妹と呼んでいるんだよね？」（研究日誌 061121）と聞いた。するとさくらさんは「だめですか？」（研究日誌 061121）と私に聞いた。私は、私が尋ねたことが原因でさくらさんがゆきちゃんのことを「いとこ」と訂正して呼ぶことは避けたかったので、論文を見せて訂正する必要はないと言った。さくらさんは、「関係はいとこだけど、感情は妹。」（研究日誌 061121）と言った。

Lantolf & Pavlenko (2001) は、学習者はインプットを文法的に正しいアウトプットに換える加工装置ではなく、人として理解される必要があると述べている。本稿もさくらさんの使った「妹」ということばを、「言語コードという概念」（Kramsch, 2002, p.8）を用いて誤用分析をするのではなく、「関係はいとこだけど、感情は妹。」と言ったさくらさんの「妹」ということばの裏側にある、人としての世界を明らかにすることを試みた。次節で本調査の概要を述べた後、「妹」ということばの背景に何があるのかを3節「家族」のストーリーで示していく。

2 調査の概要

筆者は本稿の調査協力者さくらさんが来日した2002年4月に、ある地域の日本語教室でさくらさんと知り合い、その後4年にわたってさくらさんの生活という場でフィールドワークを行った。調査方法はエスノグラフィーを採用した。エスノグラフィーは「自然なセッティングやフィールドにおいて、研究者が直接的にフィールドに参加して、人々の日常の活動や社会的意味を捉えるという方法による人の研究」（Brewer, 2000, p.10）であり、調査協

*3 インタビューは主に中国語でなされたが、この引用部分は日本語でやりとりが行われた。

*4 下線の部分はすべて中国語

力者さくらさんを人として理解し、その生活を記述するためには最も適した研究方法であると考えた。エスノグラフィーのデータ収集は、参与観察によるフィールドノーツが中心となるが、筆者は調査協力者さくらさんのさまざまな生活場面—さくらさんが来日後1年半通った地域の日本語教室、買い物、筆者との外出、互いの家の訪問など—で参与観察を行った。また、詳しい親族の関係など参与観察中には聞きにくいことや、参与観察をすることによって出てきた疑問、さくらさんの考えなどを聞くために半構造化インタビューを3回（2003年3月17日、2004年9月9日、2005年2月6日）行った。その内2回は中国語の通訳者を交え中国語で、1回は通訳者を交えずに私が日本語でインタビューした。その他、研究の過程で筆者が気付いたことを書き留めた研究日誌、地域日本語教室で使ったノート、外出時に二人で筆談したメモ、電話（内容をできるだけ発話に忠実にメモ）、携帯メールの文面、彼女から来た年賀状などもすべてデータとした。

3 ストーリー「家族」

「中国帰国者」で、日本人であるさくらさんのおばあさんには7人の娘さんがいる。日本に住んでいるのは6人で、そのうち5人が夫や子供など家族を伴っての来日である。おばあさんの帰国に伴い、配偶者であるおじいさん、二世であるゆきちゃんの両親と三世になるゆきちゃんが最初に来日した。その後、順を追って4組の家族と娘さん一人が来日したが、さくらさん一家が来日したのは最後の方だった。来日してからの居住地は、さくらさんと同じ市内に3組の家族と一人の娘さん、隣り合う県に2組の家族が住んでいる。隣の県といっても、さくらさんの住む市は隣の県との境にあるため、県をまたいでの通勤も可能な距離でそれほど遠くない。私も何度かおばあさんの家やさくらさんの家などでさくらさんの親族と会ったことがあり、私が見たり聞いたりした限りでは、家族間でよく行き来しているようだった。特にさくらさんと同じ市内に住む家族同士の行き来は頻繁で、その中にゆきちゃん一家もいた。中国の人は「親族の絆が強く彼等の社会関係が

密接である」（蘭，2002，p.270）という話はよく聞かれる。さくらさん一家が一緒にいる時の様子、さくらさんが話す親族の話などから、私も感覚的にはそう感じていた。しかし、実際にどのように「絆が強く」、どれくらい「密接」なのか、それをデータから追ってみることにした。

「私の妹。」

3回目のインタビューでさくらさんは「いとこ」について話している。その時のインタビューは、日本の習慣や文化など、さくらさんが中国での生活と違うと思ったことを自由に話してもらったものである。その話の中でさくらさんは、中国人女性と結婚している日本人の同僚Sさんの話をした。

其实就是很平常叫哥哥姐姐，然后经常在一起，觉得很亲嘛。因为我们这一代几乎都是独生子女。但日本人不这样，听她讲，她丈夫的いとこ，就是他姨家的兄弟姐妹，都没有见过。在中国很远还可以坐火车，赶着一起聚一聚。

（日本語訳：中国人はいとこでもお兄さんやお姉さんと言うことは普通で、いつも一緒に遊んで、親しみを感じている。それは私たち世代がほとんど皆一人っ子というのもある。でも日本人は違って、（Sさんと結婚している）彼女が言うには、ご主人の方のいとこ、親族と会ったこともない。中国人はたとえすぐく遠くても汽車に乗っても、皆一緒に集まる。）（インタビュー中国語 050206）

インタビューの引用にあるように、中国ではいとこは親密な存在であり、それを表現するためにいとこを兄弟姉妹のように言うのは「普通」のことなのだ。つまり、たとえさくらさんの辞書に「いとこ」ということばがあったとしても、それをゆきちゃんに対して使うことはないのである。そして、そのゆきちゃんへの思いを表すもう一つのことばが「大学生」である。3回のインタビューの内、2回のインタビューで、さくらさんはゆきちゃんのことを「大学生」、「今、大学」と話している。どちらもゆきちゃん

んのことではなく、さくらさん自身の日本語学習について聞いた時である。

筆者 そしたら、あの今家族の中で一番さくらちゃんが日本語がうまいでしょう？

さくら 違う、ゆきちゃん。大学生、私の妹。

筆者 ゆきちゃんもいるね。

(インタビュー中国語 050206)*5

(さくらさんが、日本語のテキストを購入したらテープが付いていたが、今忙しくて聞いていないと話し、私が、それでもさくらさんは日本語が上手になったという話をした後)

さくら やっぱ、あのゆきちゃんが、うん、すごく。

筆者 あ、そうか。

さくら 今、大学。

筆者 うんうんうん。ゆきちゃん、がんばってる？大学で。

さくら 大学。行く前に、大変。毎日、あの勉強。

筆者 あー。

さくら うん。ゆきちゃん日本に来て、日本来る前に、あの日本語全然知らなかった。わからへん。あの、学校の勉強、英語とか、何でも、うん、むずかしい。

(インタビュー日本語 040317)

前述したように、ゆきちゃん一家は日本人であるおばあさんと一緒に 2000 年に来日した。親族の中では最初の来日である。当時ゆきちゃんは 18 歳で、日本語は全くわからずに日本の高校に入った。18 年間中国語で教育を受けたゆきちゃんが、日本の高校で日本語で勉強する大変さは想像に難くない。ゆきちゃん一家の来日から 2 年経って来日したさくらさんは、毎日大変な勉強をしているゆきちゃんに再会した。「大変、毎日勉強。」「英語とか何でも、むずかしい。」というさくらさんのことばは、頻繁に会い、勉強するゆきちゃんの姿を来日以来、ずっと

近くで見えていたからだろうと思われる。

そのゆきちゃんは「今、大学」で生命科学を専攻している。地域の日本語教室で初めて私がゆきちゃんに会った日、さくらさんはゆきちゃんの大学での専攻をノートを使って私に説明してくれた。ノートにはさくらさんの字で「人体」「生命科学」(日本語教室ノート 021207)と書かれている。「大学生」になった自慢の妹をその日私に紹介してくれたさくらさんのゆきちゃんに対する思いが、「妹です。」ということばに表現されているのだ。

移住した「中国帰国者」家族の研究では、移住時の年齢の違いによる異文化への適応度の違いが家族成員間の異文化間コミュニケーション・ギャップを生み、それが子供の教育問題の背景の一つとしてあるのではないかと(藤井・田淵, 2001),あるいは家族を解体の危機に追いやっているのではないかと(鄭, 1988, 2003)というような論調がある。家族成員の構成にもよるであろうが、「帰国者」家族はトラブルを抱えた家族と捉えられがちである。しかし全く逆の方から光を当ててみれば、つまり「解体」ではなく「絆」という観点から見れば、また違った家族の姿が見えてくる。また「帰国者」のように親族と一緒に移住した家族の研究では、一つの家族をみる、あるいはいくつかの異なる家族を比較してみるというだけでは十分ではない。さくらさんとゆきちゃんの関係に見えるように、核家族や親と子という縦のつながりのみが家族ではなく、より広い親族という横のつながりの中にも家族としての「絆」がある。さくらさんのゆきちゃんへの思いはそのような家族や親族というネットワークの中に埋め込まれているのだ。

続く二つのストーリーで、さらにさくらさんと家族との関係を示していく。さくらさんと父、さくらさんとおばさんのストーリーである。

「帰る、帰る」

さくらさんはよく家族や親族の話をする。私から尋ねることもあるが、たいていはさくらさんが自分から話してくれるのだ。地域の日本語教室で毎週会っていた頃は、お母さんが仕事を増やしたこと

*5 インタビューは主に中国語でなされたが、この引用部分は日本語でやりとりが行われた。

や、体調をくずしたこと、お父さんとお母さんが東京へ見学に行ったことなどを話してくれた。家族の話でとても盛り上がったのは、2004年7月、中国へ一時帰国していたさくらさんが日本に帰り、久しぶりに会って一緒に食事をした日だった。迎えに行った車の中では、お父さんの一時帰国の話になった。来日から2年以上経ち、さくらさんとお母さんは中国に帰っていたが、お父さんはまだ一度も帰っていなかった。今回はさくらさんとお母さん、おばさんが中国へ帰ったので、今回はお父さんの番というわけだ。食事中は、帰国で中断していた自動車学校の話や、さくらさんが仕事をしている工場の話などをした。食事が終わり、さくらさんを車で家に送った。さくらさんが「上がる？」(フィールドノート 040711)と聞いたので、少し寄っていくことにした。さくらさんの部屋に入ると、「ベッドに座って。」(フィールドノート 040711)と言われ、二人でベッドに座って話を続けた。再びお父さんの帰国の話になった。

お父さんが(中国へ)帰る話になった。とても喜んでいるようだ。さくらちゃんが両手を顔の前に広げてクルクル回し、節をつけて「帰る、帰る」とお父さんの真似をした。私は明るいお父さんらしいと思って、とても笑った。彼女もこの仕草を2回もやって見せた。お父さんはこのごろ中国の友達に、どこで会う?などのことを電話しているらしい。お休みのことを会社に言ったら、「一週間ならいい、一週間以上は困る」と言われたそうだ。でも、「一週間なら、帰ったらすぐ帰らなきゃ。短い。空港からとても遠い。」(とさくらさんは言った。)帰ったらすぐ帰るというところで、二人で大笑いした。

(フィールドノート 040711)

来日後、初めて中国へ帰国するお父さんは、中国の友達に電話をしたりして、おそらく日々楽しそうに過ごしているのだろう。そしてそのようなお父さんの真似をしながら話すさくらさんもとてもうれしそうなのだ。来日して間もない頃、地域の日本語教

室での親子の光景を見たことがある。

(さくらさんが)かばんからノートや鉛筆をだして、ななめ後ろに座っているお父さんに渡す。本はページを開いてあげている。

(フィールドノート 020427)

普段からお父さんの話はよくさくらさんから聞くのだが、インタビューで両親のことを尋ねた時、さくらさんはお父さんについて、改まってこう話している。

他就是理解力比较强把。就是他语言不好，他工作时看别人的表情。多听的说，虽然他不会说，但是对很多刚到工厂打工的中国留学生，就是说翻译一下，该做什么。

(日本語訳：父は物事を理解する能力が高い。ことばができなくても、仕事の際は相手の表情を見てわかる。よく聞いて、話すことはできないけれども、仕事場で(新しく)来たばかりの中国人の留学生に、何をするか教えてあげることもできる。)

(インタビュー中国語 050206)

日本の生活においては、ともすれば「ことばができる」か「できないか」というものさしだけですべてが判断されてしまいがちだが、自分の父は、たとえことばができなくても「表情を見て」理解し、「教えてあげることもできる」のだ。そしてそのようなすばらしい父が、帰国に際し手を顔の前でクルクル回し、節をつけて「帰る、帰る」とふざけてみせたのが、さくらさんはうれしかったのではないかと私は思った。

「3番目のおばさん」

来日1か月あまりで、さくらさんはゆきちゃんのお母さんにあたるおばさんと一緒に仕事を始めた。食品会社の仕事で、スーパーなどに出すさしみを切ったり、食品を真空パックにしたりする仕事だった。当時平日の午前中は、地域の日本語教室へ通っていたため、当初仕事は午後だけだった。しかし、

仕事を始めてから2か月あまり経った7月末、午後だけでなく午前中も同じところで仕事をするようになった。そのことを私は地域の日本語教室で聞いた。

それぞれが勉強を始めると、さくらさんがノートに（ノートを使って）仕事が変わったことを言う。ゆきちゃんに通訳してもらって、時間を変更したらいい。今まで、（仕事時間は）1時から6時までだったが、ノートに「変更」「通訳」と書き、8時から5時まで（に変更になり）、土曜日は休みと言う。おばさんも（勤務時間が）変わったと言う。

（フィールドノーツ 020727）

この時、「おばさんも変わった」と彼女はおばさんのことを話している。おばさんのことは私から質問したのではなかった。なぜなら、当時私はおばさんが同じ仕事場で働いていることを知らなかったからだ。また5人いるおばさんのうち、どのおばさんが一緒に仕事をしているのかもこの時は知らなかった。しかし、毎日同じ仕事場で一緒に働くおばさんの存在は彼女にとっては決して小さくなかった。それから約1年半後にお願した最初のインタビューで、同じ仕事についての質問から彼女はおばさんのことに触れている。インタビューで今の仕事はどうかと聞いた時だった。

筆者 ○○（会社名）、仕事はどうですか？

さくら 疲れる。でも楽しい。

筆者 楽しい？

さくら うん。

筆者 疲れる、半分。楽しい、半分。

さくら 楽しい。

筆者 え、どこが楽しい？

さくら ええと、日本人がおしゃべりの時に、あの自分が、日本語が勉強できる。

今は、3番目おばさんと一緒に。（中略）

筆者 あ、ゆきちゃんのお母さん。

さくら そうそうそう。

（インタビュー日本語 040317）

彼女は再び一緒に働いているゆきちゃんのお母さんであるおばさんの存在に言及している。この時も私からおばさんのことを聞いたのではなく、仕事かどうかという質問に対してさくらさんが話してくれたのだ。そしてインタビューが終わるまでの間に、さくらさんの話にもう一度おばさんが登場する。このインタビューが行われた時には、彼女は昼間だけでなく夜間もお父さんと同じお弁当工場で仕事を始め、都合2箇所です仕事をしていた。若いとはいえ、昼間にも仕事をして、さらに夜間の仕事は大変だろうと私は思った。

さくら もう、今二つ仕事、うん、大変や。

筆者 大変でしょ。

さくら 一日、6時間くらい寝る。

筆者 ああ、朝まで。あの、お弁当。

さくら 朝、2時まで。

筆者 2時まで。

さくら 家帰る。2時半。すぐ、寝られへん。うん。3時くらい。

あの、朝は8時、8時に起きる。

（インタビュー日本語 040317）

昼間の仕事は、夜間の仕事に比べると時給は安いとさくらさんは言う。もし、いい仕事があったら変わりたいかとの私の問いに、「変わる、変わりたいけど。」（インタビュー日本語 040317）と言った。この「けど」の理由は次のようなものだった。

さくら あの、お昼の仕事今私、もう、慣れた。辞めたくない。

筆者 ああ、ああ、辞めたくない。

さくら 特に、あのおばちゃんと一緒に。（中略）あの、私辞めたら、あのおばちゃん、あの今は年。仕事探すのもっとむずかしい。うん。私、このこと考えます。

筆者 ああ、もし辞めたら、次の仕事探すのがむずかしい？

さくら うん、そうそうそう。（中略）うん。一人で、大変、うん。寂しい。

（インタビュー日本語 040317）

さくらさんや地域の日本語教室を通して私が知り合った「帰国者」に関して言えば、親族が同じ職場に集まることはめずらしくない。それは先に来日していた親族や居住地の支援者などから仕事の情報をもらえるからであり、通勤できる範囲で「外国人」*6を雇用する会社が限られているという実情があるからでもある。しかし、さくらさんの場合、理由はそれだけではなかった。それは「おばちゃん」を一人にしたいというさくらさんのおばさんへの思いだった。

4 ストーリーが語るもの

さくらさんが「妹」ということばで表現したかったのは、ゆきちゃんへの思いであり、その背景にある、父やおばさんなど家族や親族との「絆」であった。「妹」ということばは、「言語コード」(Kramersch, 2002, p.8)としては正しくないかもしれないが、さくらさんがゆきちゃんへの思いを表現するための彼女にとっての適切なことばであった。

Pavlenko (2006) は、二言語 (bilingualism) 及び多言語使用 (multilingualism) の新しい研究領域として「感情」(emotions) をあげている。これは従来の情意要因 (affective factor)、たとえば態度や動機づけの研究にあるような、個人の情意的状態が第二言語の習得や使用に与える影響に焦点をあてるのではなく、感情的ことばや概念が二言語及び多言語使用の人の心的辞書にどのように表象されるのかを理解し、言語及び心理言語学研究に人間の顔 (human face) をつけ、話者の生きられた経験 (lived experiences) を考慮する方法を探求するなど、個人の感情の表現やプロセスにより関心を持つものである。Pavlenko (2006) の論文集の中で Besemeres (2006) は、移住経験などをもつ作家の自伝を取り上げている。Parks (1996) では、現在彼が住むイタリアの言語や文化の影響を受けて、Parks 自身がいや

いやながらも「少しずつイタリア人になって」いく様子が描かれている。たとえば、Parks の娘の誕生の際、誕生から5分ほどの間に、妻 Rita がたくさんの愛情を表す指小辞*7—*ciccolina*, *ciccina* (小さくて丸々とした赤ちゃん) など—を創り出して娘に夢中になっているのを見て、「これはイタリア人の最も優れている分野に違いない。」と Parks が述べている部分を引用し、これらの指小辞は感情を表現する英語とイタリア語のアプローチの文化的ギャップを示していると Besemeres (2006) は述べている。さらに Besemeres (2006) は、イタリア語とポーランド語との違いに触れ、イタリア語の *uccellina* (小鳥), *ciccina* (小さくて丸々とした) などのことばは、赤ちゃんという概念と結びついた喜び、賞賛、祝いなどを表す語と思われるが、ポーランド語の同様の指小辞—*ptaszku* (小鳥), *kotku* (子猫)—の表現は、むしろ話者との親しい絆や子供への優しさを表すとしている。これらの例から、Besemeres (2006) は、話者は感情を表現するためにことばを使い、ことばは話者の感情を形作る、したがって、表現された感情はことばそのものと密接な関係があるため、このようなことばを直接的に他の言語に訳すことはむずかしいと述べている。

本稿は、調査協力者さくらさんの言った「妹」ということばから出発した。そしてそのことばの背景には、さくらさんと家族や親族との関係があった。さくらさんが「妹」ということばを使うのは、「いとこ」という親族の関係を示すためではなく、彼女のゆきちゃんに対する親しみ、誇りなどの感情、さらに家族や親族への思いや「絆」をことばで表現するためであり、さくらさん自身の中で人とのつながりを形作るためであった。

Pavlenko (2002) は、社会心理学の第二言語習得研究を批判して、単一言語 (monolingual)、単一文化 (monocultural) に偏った世界観、及びネイティブの文化や、ホスト国の文化というような固定的で

*6 「外国人」という用語は字義どおりに解釈すると「国の外の人」という意味になり、長期的に定住している住民には適切な用語とは言えないのではないかと、また何をもって「国の人」とするかなどさまざまな議論があるが、ここでは引用文献を含め一般的な用語であることに鑑み、便宜的に使用する。

*7 “*deminutive*” : ある語に付加し、その語の示すものよりもさらに小さい観念あるいは親愛の情を示す接辞。イタリア語、ドイツ語、ロシア語によく見られる。(出典: 広辞苑)

矮小化された文化が研究の基本にあると述べている。では、日本語教育はどうであろうか。日本語という「単一言語」、日本という「単一文化」を「標準」(Pavlenko, 2006, p.28)としてはいないだろうか。現代は地球規模で人が移動する時代であり、日本社会も例外ではない。すでに200万人以上の「外国人」が日本に定住している。すなわち、さくらさんのように日本語では適切に表現できないかもしれない豊かな感情をもった多くの二言語及び多言語話者が生活しているのである。だが、彼らのその豊かな感情を表現する彼らにとっての適切なことばが、現在の日本社会で充分受け入れられているとは言いがたい。本稿で取り上げた「妹」の例で考えると、おそらく多くの日本語教師が「妹」を「誤用」あるいは「母語の干渉」というマイナスのラベルを貼り、「いとこ」だと訂正してしまうだろう。

Cook (1991, 2002) は、第二言語話者は目標言語の母語話者より言語能力が劣っているのではなく、第一言語と第二言語の両方の知識が共存し、影響し合うマルチコンピテンス (multi-competence) をもっていると捉えるべきだと主張している。この考えに立てば、マルチコンピテンスをもつ第二言語話者の誤用は、マイナスのラベルを貼ったり、訂正したりするものではなく、一つの正当なバリエーションであるという見方ができる。Pavlenko (2006) は、二言語や多言語話者を社会が受容しないことに起因する彼らの不安は、二言語や多言語使用が「例外」(Pavlenko, 2006, p.28)ではなく、「標準」として社会に受容され、ハイブリッドが名誉であるとされることによって消えていくと述べている。本稿の調査協力者さくらさんは日本と中国を行き来し、日本語と中国語の両方の言語、あるいはそれ以上の言語の世界を知っており、その能力を日本の社会やコミュニティに活かせる可能性をもった豊かな存在である。そのような多言語話者が日本社会に受容されるためには、「ホスト社会の人々の意識の変容や社会の改革が必要」(山田, 2003, p.25)であり、現在の日本語教育の「標準」も再考する必要があると言えるのではないだろうか。

文献

- 蘭信三 (2002). 『偽装日系中国人事件』とは何か?—中国人帰国者援護政策と入管法の交錯点 駒井洋 (編) 『講座 グローバル化する日本と移民問題 第I期第1巻 国際化のなかの移民政策の課題』(pp.253-280) 明石書店.
- 井出孫六 (1991). 『終わりなき旅』岩波書店.
- 鄭暎恵 (1988). ある『中国帰国者』における家族—適応過程に生じた家族の葛藤『解放社会学研究』2, 92-107.
- 鄭暎恵 (2003). 『〈民が代〉斉唱』岩波書店.
- 藤井健太・田渕五十生 (2001). 『中国帰国者三世児童・生徒の生活と教育課題—4人の子どものエスノグラフィーを通して』2006年06月09日 http://www.kikokusha-center.or.jp/resource/new-resource_f.htm より取得
- 山下晋司・船曳建夫 (1997). 『文化人類学キーワード』有斐閣.
- 山田泉 (2003). 日本語教育の文脈を考える 岡崎洋三・西口光一・山田泉 (編) 『人間主義の日本語教育』(pp.9-43) 凡人社.
- Brewer, J. (2000). *Ethnography*. Buckingham: Open University Press.
- Besemeres, M. (2006). Language and emotional experience: The voice of translingual memoir. In A. Pavlenko (Ed.), *Bilingual minds: Emotional experience, expression and representation* (pp. 34-58). Clevedon: Multilingual Matters.
- Cook, V. J. (1991). The poverty-of-the-stimulus argument and multi-competence. *Second language research*, 7(2), 103-117.
- Cook, V. J. (2002). Background to the L2 user. In V. J. Cook (Ed.), *Portraits of the L2 user*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Kramsch, C. (2002). Introduction: How can we tell the dancer from the dance? In C. Kramsch (Ed.), *Language acquisition and language*

- socialization: Ecological perspectives* (pp. 1-30). London: Continuum.
- Lantolf, J. P., & Pavlenko, A. (2001). Second language activity theory: Understanding learners as people. In M. Breen (Ed.), *Learner contributions to language learning: New directions in research* (pp. 141-158). London: Longman.
- Murdock, G. P. (1965). *Social structure*. New York: Free Press. (マードック, G. P. 内藤莞爾 (訳) (1978). 『社会構造—核家族の社会人類学』新泉社.
- Parks, T. (1996). *An Italian education*. London: Vintage.
- Pavlenko, A. (2002). Poststructuralist approaches to the study of social factors in second language learning and use. In V. Cook (Ed.), *Portrait of the L2 users*. (pp. 277-302). Clevedon: Multilingual Matters.
- Pavlenko, A. (2006). *Bilingual minds: Emotional experience, expression and representation*. Clevedon: Multilingual Matters.